

## 最終講義「無声の声」

要木 純一

はじめに

私は、この三月（二〇二六年）に、島根大学を退職する。通例、その直前に最終講義を開くことが多いのであるが、冬から春にかけて、心身不調になることが多いので、一足早く、昨年十一月二十三日の島国文会特別講演の場を借りて、最終講義にあてさせていただいた。関係者にはご無理を申して、ご面倒をかけたことをお詫びする。

その講義のあらましを以下に紹介するのだが、いくつか言い足らなかつたことをおぎなつた。もとのままではない。見ての通り、支離滅裂、中途半端、言葉不足であるが、ただ、それこそが私の学問の形であり、支離滅裂、中途半端、言葉不足のまま、私は研究人生を続け、そして終えることであろう。だんだんと大学、世の中がせちがらくなつてきて、このようないい加減な言説は許されなくなつてきている。年寄りの妄言が許された、緩い時代の記録として後世に残しておきたい。

最終講義「無声の声」

過分のご紹介に預かつた要木です。今日は、中文、日文の卒業生、在学生にたくさん集まっていただき

ましたが、私の授業（漢文講読・漢文基礎演習）覚えていきますか。何時間もかけて、平仄、押韻の話をねちねちと繰り返し返し、漢和辞典で一字一字四声、平仄を調べさせた。中国語、まして古代の中国語など知らないのに、こんなことをして何の役に立つのかと思っただろうし、脱落する学生も多かった。そこに、音楽的な中国韻文の美しさがあるのだといっても、ネイティブならそれを感じることもできるかもしれないが、日本人がいくら平仄を調べて、漢字とにらめっこしても、何にも音なんか聞こえないじゃないか。訓読できればいいではないか。意味が分かればいいじゃないか。なぜ平仄、韻調べなど、うつとうしいことを強制するのか。その疑問にこの講義で少しでも答えられればいいのですが。

さて、無声の声という題で、漢字を見てもなんの音も聞こえないのに、何かがあなたがたの無意識に聞こえているよということを私はいいたいのですが、まずは「無声の声」の出典から。前漢の時代の思想百科事典『淮南子』繆称訓に

有声之声、不過百里。無声之声、施于四海。（有声の声は、百里に過ぎず。無声の声は、四海に施す（あるいは「のぶ」））

とあります。私が生まれた安保闘争が激しかったところに、岸信介が「私には声無き声が聞こえる」といったのが日本では有名ですが、ニュアンスはちよつと違って、本来は、為政者は赫々たる名声よりも、人に知られないような奥深くたたえた徳の方が、むしろ全世界を感化するという意味でしょう。この講義では、声と認識されない声という、語義通りの解釈で用いています。そして、その無声の声は、中国から海を隔てた、全然違う言語の日本人の耳にも響いていて、日本人の心を今も揺り動かすのだと言いたいのです。また、このあたり、自分でも整理できていないのですが、韻律とか、繰り返しとかは、音のありようであって、直接に音とはいえない、こんな概念も含めて、無声の声といっています。

さて、その聞こえぬ音とは何か。例を挙げましょう。宍道湖に浮かぶ嫁ヶ島に、「碧雲湖棹歌」という漢詩の碑が立っています。その作者や由来、訳注などかつて発表したことがあります。

碧雲湖棹歌 永坂石埭 ○平声 ●仄声 ◎平声で押韻。

美人不見碧雲飛 美人は見ず碧雲は飛ぶ

●○○●●○○◎

惆悵湖山入夕暉 惆悵す湖山夕暉入るに

○○●○○●●◎

一幅淞波誰剪取 一幅の淞波は誰か剪取したる

●●○○○○●●

春潮痕似嫁時衣 春潮痕は似たり嫁する時の衣に

○○○○●●○○◎

この○、●で書いたのが、平声、仄声ですね。◎は平声での押韻を示す。思い出しましたか。平仄は、漢字音におけるアクセント（ピッチ、声調）のようなものですが、中国語を知らない人にとっては、辞書を引いてはじめてわかる、まさに「無声の声」なのです。二つのパターンのアクセントが繰り返しつつ、交代するように絶句や律詩は作られているのです。その規則を、二四不同二六対、反法、粘法といった術語で説明したのを覚えていますか。でも、日本人にとって、平仄って何もきこえませんよね。これ、日本で漢詩を作る人、読む人には、何かが聞こえていたのだろうと思います。もとの中国語と関係なく、タン、タツの組み合わせとか、高音、低音の組み合わせとか、人によっては目の前が暗くなったり、明るくなっ

たり視覚的な、そんなリズム感覚を感じていたのではないか。証拠や証言はないですね。まともな学問でこんなことを主張してはいけません。いずれにせよ、漢詩文の専門家は、訓読はしなかったと思います。英語と同じで、和訳の訓練だけでは、外国語の作文はできない。発音はなまっけてもいいから、語順通りに読むべきです。たとえば、碧雲湖棹歌の起句「美人不見碧雲飛」を、そのまま日本漢字音(できるだけ漢音)で「び じん ふ けん へき うん ひ」と読むわけです。これを直読といいます。直読しながら、ただちに平仄のなんらかのリズム、無声の音が昔の(ごく少数の)日本人には聞こえたんだと妄想しております。訓読でわかりにくく、直読でわかりやすい、中国詩のレトリックとして、頭子音(声母)の繰返しである双声、韻(韻母)の繰返しである疊韻があります。たとえば、双声は、惆悵 *tyu tyo* 誰剪取 *su sen syu*。疊韻は、(嫁)時衣 (*ka zi i*)。この繰返しですが、読者の無意識に何かを働きかけると私は思うのです。無意識とか潜在意識とか、なんでも言ってしまうので、卒論で安易に使ってはいけませんよ。作者はこう言っているが、無意識では逆のことを考えているんだ、なんて、ひどいですね。でももう卒論を指導することもなし、勝手なことを言わせてもらいます。

でもまあ、漢字の三要素は、形、音、義で、この三要素が密接に絡み合っているわけで、海を渡り、日本語で訓読みして、もとの漢字音がいったん消えても、形と義によって、音がまた復活して、聞こえてくるといえるのは、そんなに外れていない理屈ではないか。そういうわけで、本来の漢詩文はもちろん、漢文訓読調の和文になりきってしまったものも、声無き声を意識していると思うんですよ。例えば、平家物語の冒頭、

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響き有り。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を表す。奢れる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。猛き者も遂には亡びぬ、ひとえに風の前の塵に同じ。」



夫和歌(○)者、wa ka

託其根於心地(●)、発其華於詞林(○)者也。

人之在世(●)、不能無為(○)。

思慮易遷(○)、哀樂相変(●)。

感生於志(●)、詠形於言(○)。

是以逸者其声楽(●)、怨者其吟悲(○)。

可以述懷(○)、可以発憤(●)。

動天地(●)、感鬼神(○)、dou ten ti, kan ki sin.

化人倫(○)、和夫婦(●)、ka jin rin, wa fu fu.

莫宜於和歌(○)。wa ka

和歌有六義。一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌。

(夫れ和歌は、其の根を心地に託し、其の華を詞林に発する者也。人の世に在るや、為すこと無かる能わず。思慮は遷り易く、哀樂は相い変る。感は志に生じ、詠は言に形わる。是を以て、逸する者は其の声楽しく、怨む者は其の吟悲し。以て懷を述ぶ可し、以て憤を発す可し。天地を動かし、鬼神を感ぜしめ、人倫を化し、夫婦を和するは、和歌より宜しきは無し。和歌に六義有り。一に風と曰い、二に賦と曰い、三に比と曰い、四に興と曰い、五に雅と曰い、六に頌と曰う)。

対句が整っている上に、平仄も、各行の上の句の句末と下の句の句末が、交互になるように作られています。また、双声、疊韻の語の並べ方も作爲的で偶然ではないと思えます。ローマ字読みを示した「天地」、「鬼神」、「人倫」、「夫婦」(ただし、双声は、清音、濁音の区別をせず、「鬼神」は主母音の一致で疊

韻と見なす)。そして、「和歌」という疊韻の語から、また「和歌」に戻っていく。これ、紀淑望がパクった『詩経』の大序(参考)と比べるとわかるんですが、大序の文章を、六朝的な音律を意識して、並び替えて、改変しています。紀淑望にしてみれば、パクったのではなく、音律を整えてよくしてやったぞ、どうだ、えへんと威張るような気持ちではなかったか。要するにレトリックの塊のような文章なのです。訓読してしまつたら、この苦勞のあとが消えてしまいますが、後世の人は直読することはまれだったのではないかと。それでも、何らかの声無き声は聞こえた…はず。

参考 『詩』大序 (傍線部の位置をかえて、真名序に使っている)

詩者、志之所之也。在心為志、發言為詩。情動于中而形于言、言之不足、故嗟嘆之、嗟嘆之不足、故永歌之、永歌之不足、不知手之舞之足之蹈之也。情發于声、声成文、謂之音。治世之音、安以樂、其政和。乱世之音、怨以怒、其政乖。亡国之音、哀以思、其民困。故正得失、動天地、感鬼神、莫近于詩。先王以是經夫婦、成孝敬、厚人倫、美教化、移風俗。故詩有六義焉。一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌。

(詩なる者は、志の之く所也。心に在つては志と為り、言を發しては詩と為る。情は中に動いて而して言に形われ、之を言いて足らず、故に之を嗟嘆し、之を嗟嘆して足らず、故に之を永歌し、之を永歌して足らず、手の之を舞い足の之を蹈むを知らざる也。情は声に發し、声文を成す、之を音と謂う。治世の音は安くして以て樂し、其の政は和す。乱世の音は怨んで以て怒る、其の政は乖く。亡国の音は哀れにして以て思ひ、其の民は困しむ。故に得失を正し、天地を動かし、鬼神を感じしむるは、詩より近きは莫し。先王は是れを以て夫婦を經し、孝敬を成し、人倫を厚くし、教化を美しくし、風俗を移す。故に詩に六義有り焉。一に風と曰ひ、二に賦と曰ひ、三に比と曰ひ、四に興と曰ひ、五に雅と曰ひ、六に頌と曰う)。

紀貫之の『古今集』仮名序も、『詩』大序を意識していますが、中国のような、ぎちぎちのレトリックから脱して、和文の美しき(緩き?)を目指しています。

参考 『古今集』仮名序

やまとうたは、人のこころをたねとして、よろづのことはとぞなれりける。よの中にあるひとことわざしげきものなれば、心におもふ事を、みるものきくものにつけていひいだせるなり。はなになくうぐひす、みづにすむかはづのこゑをきけば、いきどしいけるものいづれかうたをよまざりける。ちからをもいれずしてあめつちをうごかし、めに見えぬおにかみをもあはれとおもはせ、をとこをむなのなかをもやはらげ、たけきものふのこころをもなぐさむるはうたなり。

さて、ここまで真面目に聞いてくれた方には申し訳ないが、すべてをおじやんにしてしまうことを言います。

平家物語冒頭、実はテキストによつて漢字が違ふし、平仄の配置が私に都合の良いような漢字を採用しています。また、諸行の行の字は普通は平声で、仄声は品行というような名詞的用法のみです。要するに、私のかくあつてほしいという願望が入つた分析でした。それに、この冒頭部以外の、平家物語の他の漢文訓読調の部分は、このようにきれいに平仄は整つていません(冒頭のみ特注説もあり得ると思ひますが)。同様に真名序の他の部分も、平仄や双声、疊韻の配置がこのように整つていません。要するに、自分の都合のいいところを引用して、自分の都合のいいように分析しているのです。いけませんねえ。卒論や演習では、根拠を示して、できるだけ客観的に、恣意的にならないようにと、くどくどといつていくせに、何たる体たらくでしょう。でも、学生指導から解放され、普通の論文ももう書かなくなる今

後、もういいのではないか、とも思うのです。本来私は、いい加減で自分勝手な人間であった。まさに、「復た自然に返るを得たり」ですね。

というわけで、以下自由に妄言をしゃべらせてもらいましょう。

すなわち、漢文学の声無き声が、日本語や日本文学の奥底に影響を与えたのではないかという妄言です。まず、かつてはほとんどの教科書に載っていた次の漢詩を読みましょう。

楓橋夜泊

張繼

月落烏啼霜滿天

江楓漁火對愁眠

姑蘇城外寒山寺 ko so jou gai kan san ji

夜半鐘聲到客船 ya han sho sei tou kak sen

(月落ち烏啼いて霜天に満つ 江楓漁火愁眠に對す 姑蘇城外寒山寺 夜半の鐘聲客船に到る)

平仄や韻の話も大切ですが、それはおいといて、第三句「姑蘇城外寒山寺」の構成について。「姑蘇」は今の蘇州の古名、「寒山」はそこにある寺の名、この固有名詞に、疊韻を潜ませているところが、ポイントです。なんでこんなことをするのか、同音を繰り返すことによつて、あの有名な蘇州の、あの有名な寒山寺の鐘を今私は聞いているのだというこの人生の不思議さにしみじみとした思いを致す……というような唐詩によくあるパターンだと説明してもいいでしょう。ですが、わたしは韻母の配置の妙に着目したい。ko so から kan san と母音が広がっていく。そして次の句は ya han と a を響かせたのちに、次第に口が狭くなっていく。こーんとなる鐘の音が、はじめは小さかったのが、次第に大きくなり、最高潮に達した後、次第に小さくなり、余韻を響かせる、というように感じたいのです。鐘の音自体というよりも、



景というよりも気分が感じられます。芭蕉は杜甫を愛読し、杜甫は双声、疊韻をそれはそれはうまく使う作家。芭蕉は、漢詩の声なき声を学んだ……というのはどうですか。

閑かきや岩にしみいる蟬の声 芭蕉

si' zu ka sa ya wa n[ ] si m[ ] ru se m[ ] no ko e

は、今度は子音szの音に、しずかき(sī zu ka sa)もszが多いですね(の気持ちを含んでいます)。中の句では、「音を響かせて、岩の中にセミの音がしみこんでいくような感じがします。

下々も下々下々の下国の涼しさよ 一茶

これはもう声無き声とはいえない。あからさまですね。ssの音を連ねた、気色の悪い感じの後に、sz系の音で、涼風がさっと吹く感じ。音感と配置の妙です。

あきらかに漢詩の声無き声を意識しているものとして次の近代詩を挙げましょう。

てふてふが一匹韃靼海峡を渡つて行つた 安西冬衛

前の部分が、漢語から成り立っています。蝶蝶、一匹、韃靼、海峡。これが重言(同字を繰り返す)、双声、疊韻なんですね。蝶蝶は、古代中国語では、tēp tēp。その音感を生かすために、わざと字音仮名遣い(歴史的仮名遣い)の仮名に開いている。実際に読むときは現代音で「ちょうちょう」と読んでいたでしょう。でも、昔の音が聞こえてくる気がする。匹を「ひき」と読むのは訓読みです。音読みは「匹敵」の「ひ

つ」、古代中国音は $\text{p}$ 、 $\text{h}$ 、 $\text{f}$ で疊韻となります。韃靼は古代中国音は $\text{p}$ 、 $\text{t}$ 、 $\text{f}$ 。清濁を無視すれば双声。海峡は $\text{p}$ 、 $\text{ai}$ 、 $\text{k}$ 、 $\text{e}$ 、 $\text{p}$ で双声。安西冬衛は、大連育ちですが、中国語が身近にある中で、これらのことを厳密ではなくても、なんとなくわきまえていたのではないのでしょうか。普通の日本人にとっては声無き声であったものを聞いていたのではないのでしょうか。末尾の大和言葉の「渡つて行つた」の部分も、双声、疊韻のリズムを引きずっているような気がします。

このリズム感や音感というものは説明しにくい。「てふてふ」という音に私は蝶蝶がひらひら舞っているような音感を感じるのですが、なぜそう感じるのかということ、科学的に扱うことはむずかしい。

この音感の説明に挑んだ本で古典的なものに、幸田露伴『音幻論』があります。音感という対象が対象だけに、科学的な究明には乏しいのですが、多くの実例によって解析しようとしています。「韻」の項目を引きましよう。

「ア」は全体発生の意、「ウ」はそれに反して収め、閉じ、止まる意、「イ」は突き進む意、「エ」は突き進むのではなく命令するような意、「オ」は送り出し、応ずるような意をもっている。

大体首肯できるのではないのでしょうか。特に「イ」は、舌が如実に口腔の前部に向かっていく発音で、肉体も前方に突き進んでいるかのようです。芭蕉の「岩にしみいる」のイ段の音を発音するときの舌の位置に気を付けて「いらんなぎ」。

文学作品に限らず、アニメやだじやれや流行語にも音感の重要性があります。漢語（中国語）の影響だといいたいますが、そこは抑えておきましょう。世界的に流行した漫画（アニメ）に

がありますが、この題名は、r(ɹ)音が多く、まさに突き進む感じがしますね。rの子音も、喉の奥で呼吸を阻害して発せられ、固く強い感じがします。障碍を乗り越えて突き進む感じでしょうか。ちょっと古いですが、

激おこプリンまる ge ki o ko pun pun ma ru

これ、双声、畳韻、重言がみんなそろっているんですね。リズム感の良さが歓迎を受けたんだと思います。気になるのが、

アルミ缶の上にあるミカン

もとの由来はわかりませんが、嘉門達夫の歌で知った関西の駄洒落です。これが虚を突かれたというか。標準語のアクセントでは、

高	る	み	か	ん	の	え	あ	み
低	あ		う	に	る	か	ん	

何か面白くないんですね。ところが、関西方言では、

高 あるみかんのうえに  
低 ある かん

で、いかにも駄洒落という感じで面白みがあります。思うに、標準語のアクセントでは、「ある」と「みかん」が別語として切り離されてしまう。関西語アクセントでは、「あるみかん」と一塊で読むので、「アルミ缶」との類似(と微妙な相違)が引き立っているのではないか。つまらんことに拘るとお思いでしょうか、中国詩の平仄と句の切れ目の関係、現代中国語の変調の問題に通ずるものがあると個人的には思っています。

このついでに、音感と無意識の関係について、日頃、思っていることを。

女性の名前で、「子(こ)」で終わる場合と「美(み)」で終わる場合のアクセントの違いが前から不思議でした。たとえば、佳子と佳美。

高 よ しみ  
低 しこ よ

ありえない名前でも同様。

高 ば かみ ペ まみ きよ みやみ  
低 かこ ば まこ ペ みやこ きよ

どうも、名前全体でアクセントを覚えているわけではなさそうです。「こ」で終わるからこのアクセン

トで、「み」で終わるからこのアクセントで、というように、発音する前の脳内で、何かが起こっている。それは意識されないので無意識といっているのではないか。ここに単なる記憶だけでなく、いろいろなデータが入ってきて、反応が起こる。そこに、それこそ中国古代からの無声の音が関わって来るのではないか。ユングの集団無意識のようなことを考えています。学問ではありませんね。このままでは、老後の趣味は、宗教、オカルト、神秘主義、陰謀論ということになるかもしれません。生暖かく見守ってください。

さて、やなせたかし作の子供たちのヒーロー「アンパンマン」も、an pan man、いわば畳韻ですね。幸田露伴の「音幻論」にいうように、全体発生の「あ」で何かが生まれる強さを示し、やわらかい鼻音「ん」であたたかい優しいイメージを作っていると思います。今年の朝ドラ「あんばん」にちなんで、やなせたかしの作品における無声の声、おもに押韻について考えてみましょう。

「手のひらを太陽に」

やなせたかし作詞・いずみたく作曲

ぼくらはみんな(ㇷ) 生きている(ㇷ)

生きているから(ㇷ) 歌うんだ(ㇷ)

ぼくらはみんな(ㇷ) 生きている(ㇷ)

生きているから(ㇷ) かなしいんだ(ㇷ)

(中略)

ミミズだって(ㇷ) オケラだって(ㇷ)

アメンボだって(ㇷ)

みんな みんな(ㇷ) 生きているんだ(ㇷ)

友だちなんだ(ㇷ)

やなせたかしが鬱病を患ったときに、電球にてのひらを当てて、血潮が流れているのがみえた(ように幻視した?)時に、思いついた歌詞だと言います。その後彼は恢復します。「ウ」で「収め、とじ」、エネルギーをためたところで、「ア」で発散開放する。子供たちというよりも、自分と同じように心病む人に対する応援歌にふさわしい韻の配置となっています。私の小学生のころにはやった替え歌に「ぼくらはみんな生きている。生きているからみんな死ぬ」というのがありました。カスですね。「ウ」で終わると奈落の底に沈んでいくような感じになります。ミミズだって以下の「エ」段はまさに「命令するような意」。自らを励ます気分でしょうか。

アンパンマンのテーマソング。

「アンパンマンのマーチ」

やなせたかし作詞・三木たかし作曲

そうだうれしんだ(㊂)

生きるよろこび

たとえ胸の傷がいたんでも

なんのために生まれて(㊂)

何をして生きるのか(㊂)

こたえられないなんて(㊂)

そんなのはいやだ!(㊂)

(中略)

ああアンパンマン優しい君は(㊂)

いけー！(a)みんなの夢(b) まもるため(c)

「手のひらを太陽に」と同様のことがいえると思います。アンパンマンについて、やなせたかしは言っています。幼稚園児のころはアンパンマンが大好きだった子が、小学生になるとあんなのダサイと言って見なくなる。でもそれでいいんだ。子供の時に、アンパンマンを見て積極的な人生観をもつようになってくれれば、大人になって苦境に立った時、立ち向かう気持ちをおこすことができる。まあ、洗脳という言葉が頭をかすめる、ちよつとやばいところがありますが。最近では、昔と比べると、学生がずっと明るくなったように思います。このアンパンマンに育てられたからではないでしょうか。あなたがたも、失恋したり、単位を落としたりしたとき、がつくりしないで、宍道湖の夕陽を見ながら、アンパンマンを思い出してください。きつと、「そうだうれいんだ生きるよろこび」の歌が脳内に響き鳴り、明日に向かって立ち直ることができるとしよう。アンパンマンのおかげです。あなた方こそ、アンパンマンチルドレンだ。

冗談はそれくらいにして、最近は言語戦略ということがよく言われますが、やなせたかしの歌も、人を勇気づけ、人を変えるという意味で言語戦略と言えるでしょう。しかし、何ととっても、中国こそ今に至るまで言語戦略の国。文学も、日本のように誰も聞いていなくても、ぶつぶつ独り言をいうようなものではなく、必ず読者の心を動かし、多くの場合政治を動かすことが目的になっています。政治と文学が非常に距離が近いのです。しかも、レトリックを駆使して、無意識のうちに洗脳する傾向が強い。この辺、日本人からしたら、ちよつとついて行けない点です。

为人民服務(wei ren min fu wu) 国家安全(guo jia an quan) 和諧社会(he xie she hui)

中国共産党のスローガンも、よく見れば、双声、疊韻が含まれています。ただし、ㄅとㄆ、ㄊとㄎを同系の子音とみなすとか、ㄓとㄔをㄓとと発音するとか、いくつか操作を加える必要がありますが。アンパンマンの場合と同じように、幼い時から、これを叩き込まれて身につくと、長じて馬鹿らしく思い、反発するようになって、やはりそれが正しいことだと心の底では信じるようになります。伝統的には、自己及び親族中心主義で、せいぜい狭い共同体の利害しか考えなかつたあの中国人が、いまや、人民に服務し、国家の安全（治安）を考え、協調的な社会を建設しようとしている……らしい。これぞ、ある意味、潜在意識に働きかける声無き声とは言えますまいか。最近のスローガンでは、台湾問題是中国核心利益中的核心（台湾問題是中国核心利益中的核心）。核心ㄓㄨㄛˊ、ㄒㄩˊ、利益ㄌㄧˋ、ㄕㄨˊと双声、疊韻が使われています。この問題についてはいろいろ言いたいことがあるのですが、自分というよりも、教え子に迷惑がかかるかもしれないので、自粛します。学生に反中思想を吹き込む大学教授という間違つた情報が伝わるかもしれませんからね。学生、私の言うこと全然聞いてくれないのにな。文化大革命とそれがもたらした日本の混乱を知っている私には、中国はまだまだ安心できません。

さてもう一つ、おまけの話します。皆さん、「腸感冒」という言葉を知っていますか。おなかを壊す風邪のことで、これ実は山陰だけの方言だということ最近有名になってます。私も、松江に来てお医者さんにかかつて初めて聞きました。なぜ、山陰だけで？。日本国語大辞典には載っていないようだが、それがいつ言い始めたんだらうと疑問に思っていました。この前、国会図書館デジタルコレクションで「腸感冒」を検索しました。この全文の検索便利です。日本語学・文学の人、ぜひ知っておいてください。すると、杉田玄端訳の『痘瘡金鍼』（明治二年出版）という本に、

牛痘ノ疱ハ：小兒ハ甚ダ安静ナラズシテ、夜中病ヲ發シ易ク、皮膚熱シ大渴シテ甚ダ急性病ヲ發シ易ク特ニ肺焮衝、腸感冒ヲ發シ易シ。

とありました。

杉田玄端は、杉田玄白の直系子孫、養子なので血はつながってませんが。「痘瘡金鍼」はその序によるともとドイツの医学書の翻訳だそうです。おそらく、幕末から明治に、蘭医や洋医が広く使っていた訳語であろうと思われます。幕末、明治初期、江戸や京都に遊学して、松江に帰って、町医者となった人たちがあり、その人たちがこの言葉を持って帰って、患者に対して使用し、師弟関係等で広がって今に至ったのではないでしょうか。江戸時代の用例、もとのオランダ語(ドイツ語?)はどのようなものか、等ももっと調べるべきですが、私にはその気力がありません。あなた方調べてください。今、「腸感冒」の平仄が○●●●であり、それと対になる「肺嗽衝」の平仄が●●●○であることを指摘しておきます。三字の句のとして理想的な平仄の配置です。どうも、これらの症例の訳語あるいは造語は、中国本土の人間が、かかわっていたのではないか。もしくは、無声の音が聞こえる、漢学に造詣の深い日本の医者かもしれぬ。「肺嗽衝」の「嗽」字はまれな字なので、ひよっとしたら「欣」字と同じ平声と見なしていたか、それなら●○○となつて、「腸感冒」の○●●●と対になつて好都合なのだが。なんてことを考えて、それ以上のことは調べない。見たことのない漢語に出会うと、いつも平仄を考え、その無声の声を聞いてしまう。それ以上調べないで終わつちやう。これは一種の病氣ですかね。病膏肓に入るといふべきでしょうか。

漢文学にかぎらず、文学の快樂の一つは、音感を楽しむこと、さらにこの無声の声を味わうことにあると思つているのですが、十人に一人くらいしかわかつてくれない感じですね。漢字の三要素でいえば義(意味、筋)の快樂、形(視覚)の快樂の方が、ずっと楽しいからでしょうか。文学で音感を楽しむなんてまどろっこしい、それなら音楽や歌の方で直接、大量に快樂を得た方がいいということでしょうか。まして、無声の声では、実際に音は聞こえないからなあ。まあ、これはこれで音楽にはない楽しみがあるんですよ。無声の声にこだわっていくのが、私の人生なんでしょう。

時間を大幅に超えて、中途半端なままに最終講義を終えます。まあでも、教育者、研究者として中途半端に終わった私にふさわしい終わり方のような気がします。ご清聴ありがとうございました。

終わりに

三十五年間、お世話になった島根大学の教職員、学生、関係者に感謝申し上げます。こんな私を放任してくれてありがとう。